

討議

討議 [三谷 幸司 非常勤講師]

- ①調査対象場所の選定理由
- ②「道路空間」と題名にあるが、本来「空間」という表現の場合、高さ方向を考慮する必要があると考えているのですが、建物の高さの評価はどうなっているのか。

回答

- ①大阪府堺市は環境モデル都市に認定されており、第2次環境基本計画で“快適な環境は、都市の魅力を高め、賑わいのある街の実現に結びつく”とし、都市環境に「賑わい」を要素として設定していることから堺市を調査対象場所とした。その中でも、“賑わい”は都心部での評価指標であることから、堺市内の中心市街地である南海高野線堺東駅周辺の道路で、自動車交通が主体の大阪和泉南線と歩行者に留意した大小路筋を調査対象場所とし、それらの違いを検証することとした。また、上記2か所を調査対象場所とする既往研究では、歩道幅員と自転車環境評価には重要であるという知見が得られたものの、けやき通りは歩道幅員が狭いが環境が良いと評価されている一方で、歩道幅員の広い大道筋が環境面で相反する回答が得られたことから、環境評価には交通量と空間規模の適正化が重要であるという仮説をたて、それらを検証するために、これらの2か所を調査対象場所として追加することとした。
- ②確かに今後の方向性として高さ方向を考慮する必要があると考えているが、まずは、面的な要素として考えたため、現時点では高さ方向は考慮できていない。また、結果論ではあるが、ヒアリング調査において、建物の高さに関する項目を回答された方はほとんどおらず、現時点では高さ方向は環境評価において重要な項目ではないと考えている。

討議 [横山 俊祐 教授]

- ①この研究のオリジナリティは。
- ②回帰式の捉え方について(梗概 6(3))、効果が2倍になればいいのか。感覚的なものと数値の関係で、数値に意味はあるのか。

回答

- ①環境を評価することが最終的な目的ではあるが、既往研究の結果から直接評価することが難しく、賑わいの影響要因分析の分析精度が高かったため、環境を間接的に評価することが妥当であるという知見を得ていた。そこで、空間評価の基本指標として、“環境”、“賑わい”、“愛着”、“景観”を取り上げ、間接的に評価し

ようと考えたことが、本研究のオリジナリティである。また、これら4指標は曖昧なものであり、人々の主観的な要素が強く影響しており、人々の率直な意見を伺いたかったために、あえて定義せず、それら評価の平均的特性や影響要因を抽出しようと考えたことも本研究の特徴である。

- ②この回帰式は4指標の「良い:1」、「普通:0」、「悪い:-1」と置き換えて、4指標に対する満足度を-1から1で例示的に表している式である。そして、環境改善施策を講じることによって、環境にはどれだけの効果が生まれ、その結果が3指標に与える影響を例示したものである。よって、質疑であったように、ある施策を講じることで効果が2倍になるという考え方ではなく、それだけその指標に対する評価や満足度が向上するという考え方である。

討議 [水谷 聡 准教授]

曖昧なものである環境を“賑わい”、“愛着”、“景観”といった曖昧なもので評価することに、違和感をいだいてしまう。

回答

- 確かに、それぞれの要素は曖昧なものである。しかし、それらの中でも、評価しやすい要素を用いて環境を評価しようということが本研究のアプローチである。具体的には、本研究で設定したヒアリング項目を説明変数とし、環境、賑わい、愛着、景観を目的変数として、判別式を求めて、最も分析精度が高かった指標(本研究で設定した説明変数で最も4指標を予測・判別することができた指標)を用いることで、間接的に環境を評価しようと考えた。既往研究の結果から、環境は直接評価することが難しく、賑わいを介して間接的に評価することができたという結果から、本研究でも、仮説として環境は直接評価することが難しいため、“賑わい”、“愛着”、“景観”から間接的に評価しようと考えていた。しかし、分析の結果、環境の影響要因分析精度が高かったために、結果的には直接的に環境を評価することが妥当と判断した。

また、曖昧な要素ということであるが、そもそもこれらは人々の主観的な判断による傾向が強いため、曖昧な要素が多く含まれることは当然のことであり、その平均的特性を理解するためには、人々の理解が最も重要と考えたため、研究方法も歩行者の意見を率直に伺うことができるヒアリングを用いることとした。